



日本植物病理学会ニュース 第6号

(1997年8月)

名誉会員・永年会員の略歴とお話

名誉会員 岸 國平



大正15年8月3日群馬県横野村(現赤城村)で出生。旧制渋川中学4修で陸士へ、終戦で中退。東京大学農学部農学科入学、植物病理学を専攻、昭和25年卒業。同年農林省へ入省、東海近畿農試園芸部(興津)病害研究室へ配属となる。その後組織変更で園芸試験場興津支場となり、田中彰一支場長、北島博室長、山田峻一先任研究員という錚々たる病理の先輩のもとで果樹、野菜の病害の研究に従事。13年間の興津在場の間にはトマト疫病菌および葉かび病菌の寄生性分化に関する研究を進め、野菜育種研究室での抵抗性育種に協力し、葉かび病抵抗性品種興津1~6号の育成に側面的貢献をするとともにこの研究によって学位取得。一方果樹病害では、温州萎縮病の病原ウイルスを草本植物にとり出し、local lesion hostであるゴマを見出し本病のゴマ検定法を確立した。昭和38年園芸試験場環境部(平塚)へ転勤となり研究室長となる。平塚では落葉果樹の病害が主研究対象となったが、前記ウイルスの温州ミカンへの戻し接種を続け、これに成功し、Satsuma dwarf virusと命名した。その後行った核果類ウイルスに関する研究と合わせ、昭和49年度日本植物病理学会賞を受賞。昭和48年野菜試験場設立により同場(津)へ転任、2年後本省へ転じ、研究管理官、研究総務官を経て農事試験場長(鴻巣)となり、同場を筑波へ移転。昭和56年農林水産技術会議事務局局長となり、2年間の在職中に農業生物資源研究所、農業環境技術研究所の設立に当たる。昭和59~61年農業研究センター所長、昭和61~平成3年生研機構理事。この間学会に関しては二十数年間評議員、副会長、会長を歴任し、会長期間中は第8回国際植物病理学会開催のための資金集めに奔走し裏方を務めた。

今後植物病理学者が、自然界における寄主と寄生者の世界を大きくとらえる視点で幅広い研究を展開してくれるこ

とを期待したい。

名誉会員 四方英四郎



大正15年9月25日函館市生まれ。昭和19年3月北海道廳立函館中学卒業。同22年3月北海道帝国大学豫科農類修了。同25年3月北海道大学農学部農業生物學科植物學専攻課程卒業。同25年12月北海道大学農学部助手。同33年4月助教授。同36年10月農学博士。同49年7月教授。平成2年3月定年退官。同年4月北海道大学名誉教授。同4年4月北海道澱粉工業協会参与。同7年4月同顧問。(株)北海道グリーンバイオ研究所取締役所長、現在に至る。

併任、非常勤；琉球大学農学部講師。北海道大学工学部講師。岐阜大学農学部講師。日本学術会議専門委員。札幌大谷短期大学講師。西野学園札幌医療科学専門学校(元札幌システムラボラトリー専門学校)講師。八紘学園北海道農業専門学校講師、現在に至る。

学会；日本植物病理学会評議員、編集幹事長、同北海道部会長。昭和63年度会長。平成9年4月同名誉会員。国際植物病理学会議 Council Member。日本ウイルス学会幹事、編集委員、北海道支部長、支部名誉会員。日本電子顕微鏡学会評議員、理事、北海道支部長。国際ウイルス分類委員会—植物ウイルス分科会委員。Archives of Phytopathology and Plant Protection, Berlin 編集委員。

国際会議等；昭和38年~40年ボイストムスン植物研究所(アメリカ)。FAO 韓国コンサルタント。日仏科学協力事業でフランス他。中国雲南農業大学客座教授、北京農業大学客員教授、石河子農学院名誉教授。ウイルス日米会議(東京)。フィリピン国際稲研究所。第1回国際植物病理学会議(ロンドン)、第13回国際昆虫会議(モスクワ)。ロックフェラー財団招聘でコロンビア、アメリカ。インド第2回国際植物病理学会(ニューデリー)。アメリカ昆虫学会(ハ

ワイ)。ASPAC-FFTC 国際シンポジウム (台湾)。シンガポール大学主催国際シンポジウム (シンガポール)。ロックフェラー財団主催ウイロイド国際ワークショップ (イタリア, ペラジオ)。第7回国際ウイルス会議 (カナダ, エドモントン)。山梨ウイロイドワークショップ組織委員長 (甲府)。第5回国際植物病理学会議組織委員 (京都)。韓国忠北農科大学, 農村振興庁農業技術研究所招聘教授。台湾中興大学農学院招聘教授。

昭和42年3月日本植物病理学会賞。同49年5月日本電子顕微鏡学会第19回瀬藤賞。平成元年5月同学会功労賞。昭和61年6月日本学士院賞。

植物ウイルスの電子顕微鏡的研究。イネ萎縮病およびレオウイルスの研究。虫媒性植物ウイルスの研究。馬鈴薯ウイルス病の研究。ホップ矮化病ウイロイドの研究。ウイルスおよびウイロイドの分子生物学および遺伝子診断の研究。

名誉会員 山口 昭



大正15年(1926)12月7日福島県塩川町に出生。福島県立会津中学校(旧制), 浦和高等学校理科(旧制)を経て, 東京大学農学部農学科(旧制)入学。明日山秀文教授の下で「オオムギ小銹病菌の寄生性分化に関する研究」, 同大学院(旧制)でも銹病菌の寄生性分化に関する研究

を行った。昭和29年(1954)5月名古屋大学農学部助手に転じ, 平井篤造教授の下で「ウイルス感染植物組織の呼吸代謝に関する研究」に従事。このテーマで昭和37年(1962)東京大学より農学博士の学位を受けた。この間, 園芸学研究室との共同でチューリップモザイク病に関する研究を行った。昭和39年(1964)10月(この年東京オリンピック大会開催)から1年間米国ミシガン州立大学に留学。昭和46年(1971)名古屋大学助教授。同年8月農林省園芸試験場盛岡支場病害研究室長に転出, リンゴ病害の研究に従事。続いて平塚の本場でナシ・モモなどの落葉果樹病害, 興津支場でカンキツ病害の研究に従事した。昭和58年(1983)果樹試験場保護部長(つくば市), 昭和59年(1984)同場長。昭和60年(1985)4月, つくば市で開催中の科学万博にご来臨の昭和天皇を果樹試験場にお迎えした。同年, 「果樹類ウイルス病の防除に関する研究」で日本植物病理学会賞受賞。昭和61年(1986)退職。直ちに(社)日本植物防疫協会に籍を置き, 第5回国際植物病理学会組織委員会副会長として開催準備に専念(1988年8月京都国際会議場で開催)。平成2年(1990)(社)日本果樹種苗協会専務理事。平成3年度日本植物病理学会会長。平成7年(1995)(社)

日本種苗協会に転じ, 現在に至る。

退職後は, ウイルスフリー果樹母樹の普及, 国際植物検疫関連, 農薬の安全使用基準の策定, 環境保全型農業の環境作りなどに努力している。健康である限りお役に立てればと考えている。

永年会員 尾添 茂



大正10年12月5日出雲市で出生。昭和16年12月鹿児島高等農林学校農学科卒, 同17年1月農林省農事試験場雇(病理部), 同21年8月鳥取県立農事試験場嘱託(病虫部), 同22年7月農林省出雲農事改良実験所農林技官(イネごま葉枯病防除試験), 同25年12月島根県農事

試験場技師(病理昆虫部), 同36年2月同試験場病虫科長, 同46年8月~53年3月島根県農業試験場長。島根県退職後, 昭和53年10月~平成元年3月島根大学農学部講師(非常勤。植物病学特論。58年はそのほかに植物治病学), 昭和54年5月~59年3月島根県立農業大学校講師(非常勤)。また, 同47年4月~55年3月日本植物病理学会評議員, 同51年4月~63年3月島根病害虫研究会会長等。

昭和36年12月農学博士。同37年3月農林大臣感謝状(病害虫発生予察), 同42年3月日本植物病理学会賞(ムギ類黄さび・黒さび病), 平成5年11月農業試験研究一世記念会会長賞(オオムギ雲形病, ムギ類黄さび病)を受賞。

昭和21~24年: サツマイモつる割病防除, イネごま葉枯病とイネ根部発育・客土効果の持続。同24~35年: オオムギ雲形病の生態と防除, ムギ類黄さび病菌・黒さび病菌の越夏越冬と第一次発生源, クリ褐斑病。同35~41年: ブドウペスタロチアつる枯病の生態と防除, ワサビ病害。同41~49年: ブドウ晩腐病の第一次発生と防除, ブドウさび病の発生生態, ワサビ墨入病の生態と防除, アザミウマによるワサビ根茎, 葉の黒変等を研究。なお, 島根, 鳥取両県では, 一貫して病害虫発生予察を担当。

いま学会では, 先端をいく基礎的研究も盛んで, 学問の発展には誠に喜ばしい。植物病理学の目的とするところは作物の健全な生育である。故に, その基礎研究から, 紆余曲折を経ながらも防除へつないでいく研究への展開が必要だし, また実際防除の立場からは, 従来からの個体対象の域を越えた新しい視点で, 作物集団を対象とした発病, 流行機構の解析や防除方策等の研究が盛んになってほしいと思う。

永年会員 水澤芳名



大正8年3月10日横浜市戸部町に出生。昭和16年5月東京農業大学学部農学科第3学年より肺結核にて休学。19年秋徴兵検査丁種合格（兵役免除）、20年9月復学、21年9月卒業。22年3月農林省農事試験場（西ヶ原）入場、助手を命ぜられ病理部勤務、同年10月農林技官3級、25年4月農業技術研究所と改称、病理昆虫部病理科勤務。29年9月第1回放射性同位元素基本技術講習会の課程修了、34年1月神奈川県割愛申請を受け農林省退職、神奈川県農業試験場病理昆虫部勤務、38年病理昆虫科長、農業総合研究所と改称、47年8月技術研究部長、同年10月残留農薬対策調査のため英、独、仏ほか2カ国に出張、52年農政部参事1等級、同年6月神奈川県退職。54年7月より平成元年まで JICA 専門家としてフィリピン、フィジー、エジプト3国へ派遣された。62年4月より平成4年まで恵泉女学園短大園芸生活学科非常勤講師。

西ヶ原に入ってからすぐ種子消毒用有機水銀剤ウスブルンの生物検定を命ぜられた。相前後して入った者が研究に従事したのに私だけが研究とは言えぬ事業の仕事で心外であったが黙々と検定を行った。当時飢餓状態で朝7時から翌朝2,3時頃まで仕事をした。各社から水銀剤が持ち込まれ上からは結果の督促が続いたからだ。散布剤が始めると McCallan の方法を使うことになった。明日山先生が Boyce Thompson Inst. を訪問される時、本法の疑問点を十数箇条正してとお願いした。帰られて「彼から納得いく返事を貰えなかった」と言われたのを機に供試孢子の構造等の研究に移った。これらの研究で学位を得た。神奈川農試で電顕を入れるに当たり割愛申請を受け神奈川農試に移った。しかし、電顕を使用するような仕事は無く、外部からの依頼に専ら使用した。細胞レベルのオートラジオグラフィの開発もその一つであった。胸部レントゲン写真を見て医者は「よく生きて来ましたね」と言う。我ながらそう思う。趣味：写真、ドライブ、庭仕事、パソコン。

ymizusawa@jsn.justnet.or.jp

平成8年12月～平成9年5月の学会活動状況

1. 大会開催報告

平成9年度日本植物病理学会大会が、平成9年4月2～4日、名古屋国際会議場において開催された。参加者は800人を越え、総会に引き続き、専門分野ごとに5会場に分かれて、346題の講演・発表がなされた。ゆっくりとした落ち着いた空間の会場と、討論を含めて一題15分の持ち時間が設定された。91名におよぶ中堅・若手の座長の方々によ

り、円滑な講演・発表の進行と活発な質疑・応答が切り盛りされた。新しい知見の発表と新しい課題の発信基地として、桜の満開の季節とはいえ、460名を上回る懇親会への参加、休憩室やロビーでの活発な交流など、学術のみならず人的交流の場として、稔りある成果を残した。また、担当中部地区各県の現場における植物防疫事業に関する問題と研究成果を、広く普及する新しい試みとして、ロビーにパネルが展示された。

なお、本大会の運営は、41名の学生会員を含む総計105名の中部地区会員と、愛知県農業水産部、賛助会員各社など、多くの人的・財政的支援により支えられた。記して感謝の意を表したい。（道家紀志）

2. 研究会開催報告

(1) 第7回殺菌剤耐性菌研究会

殺菌剤耐性菌研究会の第7回シンポジウムは、107名の参加を得て、平成9年4月5日、名古屋国際会議場で開催された。

最近、新しいグループの殺菌剤が次々と開発されているが、その中から今回はアニリノピリミジン系薬剤を取り上げ、メパニピリム（クミアイ化学工業、村松憲通）、シプロジニル（ノバルティス アグロ、杉井信次）、ピリメタニル（ヘキスト・シェーリング・アグレボ、瀬古隆司）の3薬剤に対する灰色かび病菌の感受性検定方法について話題提供を受けた。未登録のものも含めた、新規薬剤に対する感受性検定方法の検討や菌の感受性のベースラインの設定は、薬剤の実用化に伴う耐性菌の発達と被害の発生を事前に防ぐために重要である。

次に、灰色かび病菌の薬剤耐性菌に関するモニタリング結果を実際の防除に迅速かつ有効に利用する目的で、耐性菌の新しい簡易検出法が紹介された（大阪農技セ、岡田清嗣）。また、耕種的、物理的防除も組み合わせた複合管理技術を使用して耐性菌の発現を抑制する実際例についても述べられた（兵庫淡路農技セ、入江和己）。

最後に、静岡県における耐性菌の発生実態と問題点についての紹介があった（静岡病害虫防除所）。

本シンポジウムの講要集（1部2,000円）をご希望の方は、研究会事務局（農環研殺菌剤動態研、TEL 0298-38-8326）までご連絡下さい。（石井英夫）

(2) 第5回バイオコントロール研究会

第5回バイオコントロール研究会は、平成9年4月5日9時から、名城大学天白11号館において、雨天にもかかわらず、予想を上回る250余名の参加者を得て開かれた。

午前中は、非病原性フザリウム菌によるフザリウム病の生物防除と題して、ラッキョウ、ホウレンソウ、トマトの実例紹介3題とこれに関連して抵抗性誘導のメカニズムに

ついて、さらに弱毒ウイルス利用によるウイルス病防除の話題提供があった。午後は、微生物資材の評価と微生物農薬の実用化に向かったの諸問題のほか、今後の研究展開の期待されるテーマとして、病原菌の population biology の利用、エンドファイトの利用、揮発性静菌物質産生糸状菌の利用が紹介された。最後にトピックスとして、第4回 PGPR ワークショップ(平成9年10月、札幌)と第1回フザリウム生物防除ワークショップ(平成8年10月、ベルツビル)の紹介があり17時に閉会した。

今回は平成11年大会時に新潟で開催される。その時まで現執行体制で運営される。(駒田 旦)

学会関連各委員からの報告

1. 日本学術会議微生物学研究連絡委員会報告

本年の活動方針として、21世紀を担う若い世代に微生物の重要性を理解させるための微研連主催公開講演会を開催することに集中することとした。この方針に基づき、「微生物との戦いとその利用」と題する一般向けの講演会を以下の2回に分けて開催することとした。

第1回講演会

平成9年3月14日(金) 於 日本学術会議講堂

第1部 微生物との戦い

「人間はエイズを撲滅できるか」

栗村 敬(大阪大学微生物病研究所教授)

「大腸菌 O-157 感染を未然に防ぐには」

本田 武(大阪大学微生物病研究所教授)

第2部 微生物の利用

「病気にかからない植物はできるのか?」

奥 八郎(岡山大学名誉教授)

「廃棄プラスチックを土にもどす試み」

土肥義治(理化学研究所主任研究員)

「微生物がいなければマグロは育たない」

木暮一啓(東京大学海洋研究所助教授)

第2回講演会

平成9年5月23日(金) 於 日本学術会議講堂

第1部 微生物との戦い

「地球のどこかに現われる新しい伝染病」

倉田 毅(国立予衛衛生研究所部長)

「抗体だけが感染を防ぐ戦士ではない」

川上正也(北里大学名誉教授)

第2部 微生物の利用

「農薬の代わりに微生物で植物の病気は防げるか?」

駒田 旦(元 島根大学教授)

「バイオ食品、医薬と微生物の役割」

木村 光(京都大学食糧科学研究所教授)

(久能 均)

2. 日本農学会報告

平成9年度日本農学大会が、平成9年4月5日東京大学山上会館で行われた。本年度の日本農学会受賞者は次の7氏であった。

(1) 平滑筋運動の生理・薬理学的研究と医学・獣医学への展開

日本獣医学会：東京大学農学部教授 唐木英明

(2) 物理環境調節による培養植物の成長制御と大量増殖に関する研究

日本農業気象・農業土木・農業機械・日本生物環境調節・農業施設学会：千葉大学園芸学部教授 古在豊樹

(3) 植物・動物間相互作用の数理モデルによる研究一作物・害虫間および牧草・家畜間に働くダイナミクスの解明一

システム農学会・日本草地学会：茨城大学理学部教授 塩見正衛

(4) C4植物における光合成機能統御の分子機構の研究

日本農芸化学会：名古屋大学農学部教授 杉山達夫

(5) 篩管液の生理学的研究

日本土壌肥料学会：東京大学大学院農学生命科学研究科教授 茅野充男

(6) アブラナ科植物の自家不和合性に関する研究

日本育種学会：東北大学農学部教授 日向康吉

(7) 海洋生物毒の精密化学構造と動態の解析

日本水産学会：東北大学農学部教授 安元 健

また、同日午後「新しい遺伝資源の開発」というテーマでシンポジウムが開催された。

今後の学会活動および関連学会開催予定

1. 部会開催予定

- ・北海道部会：平成9年10月28日(火) 札幌市, 北海道大学学術交流会館
- ・東北部会：平成9年10月2~3日(木~金) 宮城県岩沼
- ・関東部会：平成9年10月4日(土) 藤沢市, 日本大学生物資源科学部
- ・関西部会：平成9年10月21~22日(火~水) 松江市, くにびきメッセ(島根県立産業交流会館)
- ・九州部会：平成9年9月18~19日(木~金) 別府市, 別府保養所つるみ荘

2. 談話会, 研究会開催予定

- ・植物感染生理談話会「植物病害防除戦略としての感染生理学」：平成9年8月20~22日(水~金) 新潟県湯沢町, ホテル双葉 TEL 0257-84-3357
- ・植物細菌病談話会「植物病原細菌の多様性解析と防除戦略」：平成9年11月27~28日(木~金) つくば市観音台, 農林水産技術会議事務局筑波事務所

国際植物病理学会および関連国際会議の案内

1. 7th International Congress of Plant Pathology (ICPP) : Edinburgh, Scotland, UK, August 9-16, 1998.
2. 7th International Verticillium Symposium : Athens, Greece, October 7-11, 1997.
3. 8th International Symposium on Microbial Ecology (ISME-8) : Halifax, Nova Scotia, Canada, August 9-14, 1998.
4. 9th IUPAC International Congress of Pesticide Chemistry : London, UK, August 2-7, 1998.
5. 6th International Mycological Congress : Jerusalem, Israel, August 23-28, 1998.
6. 6th International Conference on *Pseudomonas syringae* pathovars : South Africa, 1999.
7. 2nd International Rice Blast conference : Montpellier, France, August 4-8, 1998.

会員の動静

1. 人事

(1) 大学関係 (平成9年4月1日現在)

- | | | |
|-------|--------|--------------------------------------|
| 杉浦巳代治 | H 9.3 | 退官 (九州大学農学部熱帯農学研究センター 教授) |
| 高浪洋一 | H 8.12 | 九州大学農学部農学科 教授 |
| 八重樫博志 | H 9.2 | 佐賀大学農学部応用生物科学科生物調節学講座 教授 |
| 本田雄一 | H 9.4 | 島根大学生物資源学部 学部長 |
| 阿久津克己 | H 9.4 | 茨城大学農学部植物資源保護学研究室 教授 |
| 小林喜六 | H 9.4 | 北海道大学農学部植物機能開発学研究室 教授 |
| 但見明俊 | H 9.4 | 滋賀県立大学環境科学部生物資源管理学科 教授 |
| 田中欽二 | H 9.4 | 佐賀大学付属農場 教授 |
| 川北一人 | H 9.4 | 名古屋大学大学院生命農学研究科資源生物機能学講座植物病理学研究室 助教授 |
| 近藤則夫 | H 9.4 | 北海道大学農学部植物病理学研究室 助教授 |
| 渡辺雄一郎 | H 9.4 | 東京大学総合文化研究科生命環境科学系 助教授 |
| 松田克礼 | H 9.4 | 近畿大学農学総合研究所 講師 |
| 豊田和弘 | H 9.4 | 岡山大学農学部植物感染病学研究室 助手 |

(2) 農水省研究機関関係 (H 8.12~H 9.5 : 室長以上)

- | | | |
|-------|-------|--------------------------------|
| 八重樫博志 | H 9.2 | 出向 (農業環境技術研究所環境生物部微生物管理科長) 佐賀大 |
|-------|-------|--------------------------------|

学教授

- | | | |
|-------|-------|---|
| 植松 勉 | H 9.2 | 農業環境技術研究所環境生物部微生物管理科長 |
| 四方 久 | H 9.2 | 農業研究センター業務第3科長 |
| 大内 昭 | H 9.3 | 退職 (農業環境技術研究所環境生物部長) |
| 但見明俊 | H 9.3 | 退職 (草地試験場環境部長) 滋賀県立大学教授 |
| 小川 圭 | H 9.3 | 農業研究センター病害虫防除部長 |
| 日比野啓行 | H 9.3 | 農業環境技術研究所環境生物部長 |
| 梅川 学 | H 9.3 | 中国農業試験場企画連絡室長 |
| 日高 操 | H 9.3 | 東北農業試験場作物開発部上席研究官 |
| 福本文良 | H 9.3 | 北陸農業試験場企画連絡室企画科長 |
| 藤沢一郎 | H 9.4 | 北陸農業試験場水田利用部長 |
| 萩原 廣 | H 9.4 | 野菜・茶業試験場花き部病害研究室長 |
| 喜多孝一 | H 9.4 | 北海道農業試験場企画連絡室研究技術情報科長 |
| 内藤繁男 | H 9.4 | 北海道農業試験場生産環境部病害研究室長 |
| 石黒 潔 | H 9.4 | 東北農業試験場地域基盤研究部病害生態研究室長 |
| 小泉信三 | H 9.4 | 東北農業試験場水田利用部水田病害虫研究室長 |
| 高橋賢司 | H 9.4 | 九州農業試験場企画連絡室研究交流第一科長 |
| 石川浩一 | H 9.4 | 農林水産技術会議事務局研究調査官 |
| 林 長生 | H 9.4 | 愛知県農業総合試験場山間農業研究所 (指定試験主任) |
| 小林紀彦 | H 9.4 | 退職 (国際農林水産業研究センター国際研究情報官) 関西総合研究センター生物環境研究所 |
| 大槻義昭 | H 9.5 | 野菜・茶業試験場茶栽培部長 |

2. 学位取得者 (課程博士)

- | | | |
|----------------|-------|--|
| Suprapta, D.N. | H 9.3 | 鹿児島大学連合農学研究科農学博士 A study of <i>Geotrichum candidum</i> Link, the causal agent of citrus sour rot |
| 陳 劍波 | H 9.3 | 鹿児島大学連合農学研究科農学博士 Studies on the ge- |

- nome organization and pathogenicity of the rakkyo strain of tobacco mosaic virus
- 道後充恵 H 9.3 近畿大学 博士(農学) 3-インドールプロピオン酸を用いたトマト青枯病の化学的防除法開発に関する研究
- 細井好之 H 9.3 近畿大学 博士(農学) 毛状根を利用したウイルス抵抗性植物の作出法に関する研究
- 磯貝雅道 H 9.3 北海道大学 農学博士 Fijivirus 属 group2 および3のゲノム構造と分子分類
- 木場章範 H 9.3 岡山大学 博士(農学) 宿主特異性決定における植物細胞壁の役割—エンドウ・エンドウ褐紋病菌を用いた解析
- 近藤 亨 H 9.3 北海道大学 農学博士 形質転換によるジャガイモ葉巻ウイルス抵抗性ジャガイモに関する研究
- 久米龍一 H 9.3 岡山大学 博士(農学) 新規抗菌化合物 SSF-126 に関する基礎的・応用的研究
- 黒田智久 H 9.3 東京農工大学連合農学研究科 博士(農学) キュウリモザイクウイルスの分子変異に関する研究
- 松元 賢 H 9.3 九州大学 農学博士 *Rhizoctonia* 属菌の分類に関する研究
- 内藤陽子 H 9.3 島根大学 博士(農学) 植物と病原糸状菌の相互作用に及ぼす紫外線の影響
- 中畝良二 H 9.3 東京大学 農学博士 植物病原菌類における多剤耐性遺伝子の構造と機能に関する研究
- 野々村照雄 H 9.3 近畿大学 博士(農学) 標識遺伝子による *Fusarium oxysporum* の形質転換とその挙動に関する研究
- Villajuan-Abgona, R. H 9.3 岐阜大学 博士(農学) Application of hypovirulent *Rhizoctonia* spp. for biological control of Rhizoctonia damping off disease of cucumber and its associated mechanisms

- 菅原幸哉 H 9.3 北海道大学 農学博士 アズキ・ダイズ落葉病の発生に影響する諸要因および抵抗性の誘導に関する研究
- 植原珠樹 H 9.3 島根大学 博士(農学) イネいもち病菌毒素の宿主特異的作用機構の細胞学的研究
- 柳 哲峻 H 9.3 東京農業大学 博士(農学) アクレモニウム・エンドファイトに関する研究

会員の各種出版物案内

・市原耿民・上野民夫 編：植物病害の化学，学会出版センター，310 pp.，1997，¥6,796 (税抜)。

海外協力プロジェクトの紹介

現在実施中のプロジェクト方式技術協力のうち，植物病理学会関係者が長期専門家として参加している案件を学会報63巻2号の学会ニュース5号にて紹介しました。新たなプロジェクトの案件を以下の通り紹介します。

国名・プロジェクト名：パラグアイ・小農野菜生産技術改善計画，協力期間：1997.4～2002.3，長期専門家名：石島 嶺 (リーダー)，佐藤俊次。

海外留学印象記

コーネル大学への留学

1996年5月から8月にかけて，OECD フェローシップを得て，コーネル大学の Olen C. Yoder 教授の研究室に留学することができた。コーネル大学の Plant Science 分野は学内でも伝統があり，風格のある建物にも歴史が感じられた。研究室は教授陣の他に韓国，中国，ドイツなどからの多彩な顔ぶれのポスドク，大学院生，客員研究員で構成されており，日々精力的な研究が行われていた。業績としては，トウモロコシごま葉枯病菌の HMT トキシン産生遺伝子のクローニングが著名であり，その関係で私のテーマである類縁菌の北方斑点病菌の宿主特異的毒素 (BZR トキシン) の産生遺伝子のクローニング関連の仕事ができた。研究室では皆がとてもフランクで，教授といっても友人のように接してくれた。研究の進め方では，問題があったり，ライバルに出し抜かれそうになると素早く対応し，各自に仕事を割り振って問題解決を図っていた。

コーネル大はニューヨークから北西へ250 km のイサカという町にあり，町自体が大学中心に成り立っている。アメリカ社会も色々問題を抱えているようだが，イサカを見る限り，治安は良く，町は美しく，自然はたっぷりと残され，広々とした空間があり，まさに言うことなしという感じだった。また，社会的弱者に対する配慮も素晴らしい，

身体障害者用の駐車場の完備や児童のスクールバス乗降時のルール（他の車は一時停止義務有り）などがあり、違反者には厳しい罰則も設けられていた。また、見知らぬ人からも気軽に声をかけられ、アメリカ人の気さくで親切な国民性に深い感銘を受けた。これだけいいところづくめの国ではあったが、ゴミゴミした日本に帰ってくるとほっとしてしまうのは不思議なものだった。

最後になったが、4カ月という短い期間で曲がりなりにも仕事のできたのは、研究室の優秀なスタッフの指導はもちろんのこと、同時に滞在されていた東京農工大の寺岡 徹先生の懇切なアシストが大きかった。この場でお世話になった方々に深く感謝の意を表したい。（月星隆雄）

書 評

「新編 植物病原菌類解説」

著者：池上八郎，勝本 謙，原田幸雄，百町満朗
発行所・発行年：養賢堂，東京・1996年
定価：6,000円（本体），B5判 475pp.

樋浦 誠先生の「解説植物病原菌類」，また，その後改訂された「改訂・増補 植物病原菌類解説」は，大変丁寧に分かりやすく書かれていたため，植物病理学において，菌類の基礎や菌類病を学ぶ上では，大変有益な教科書としての役割を長い間果たしてきた。しかしながら，菌類学の最近の急激な進歩などのため，最新の知見を加えた新しい菌類の解説書が求められていた。これに応えるように，菌類の分類や生態などを専門とする4名の著者により，新たに「新編 植物病原菌類解説」が刊行された。本書では，樋浦先生の著書の基本的な構成や内容が引き継がれ，それに新たな知見を加えるとともに，用語の修正や新分類体系を取り入れるなどして，内容をより充実させている。また，新たに多数の図，写真，表が加えられ，初心者でも平易に理解できるように工夫がなされている。本書は，4編から構成され，第1編では，菌類と菌類の病気の基礎的な解説と，その採集・同定の手順が，第2編では，植物病原菌類として重要な約40の菌群について，それらの形態的・生態的特徴，日本産の主な種類とそれらの採集・鑑定方法が，第3編では，植物病原菌類の分離・培養・接種・保存の基礎手順が，第4編では，分類体系に従って，科と属の解説を中心に主要な分類群の特徴が，それぞれ述べられている。本書は，植物病原菌類の基礎的知識や取り扱い方を知るためには，好適の入門書であり，また，菌類を幅広く知るための参考書としても活用することができる。植物の病気に携わるすべての方々に座右においていただきたい書として推薦させていただきます。（柿 嶋 眞）

学会事務局コーナー

1. 学会費自動振込制度導入の現状とお願い

学会事務の効率化と会員各位の便宜を図るため，一昨年度から自動振込で会費納入が可能となりました。昨年度の利用者は約400名でした。本年も引き続き本制度の利用者数の拡大を図っていきたく考えています。一人でも多くの方のご協力をお願いします。なお，お申し込み案内と預金口座振替依頼書は学会報4号に綴じ込むほか，各地域部会の会場にも置いていただく予定です。

2. 平成9年度の学会事務局

平成9年度の幹事は，庶務幹事長：米山勝美，庶務幹事：鈴木 匡・有江 力・横山和成，会計幹事：高橋英樹の5氏となりました。

事務局では，鶴見典子，鈴木由喜子の2氏が日本農薬学会，日本応用動物昆虫学会および日本植物病理学会の3学会を担当しております。鈴木弥江子，前野敦子（パート）の2氏が平成9年4月末日をもってご退職なさいました。長い間お世話になり本当にありがとうございました。

平成7～8年度の幹事を担当された澤田宏之，佐藤 剛の2氏には大変ご苦労さまでした。

編集後記

大会懇親会場での，研究の第一線を退いた人の意見です。狭い自宅の書齋に学会誌や書籍が山積みになるので，学会誌本体の送付ではなく，学会誌の目次，学会記事，学会ニュースなどだけにならないだろうか。この程度なら書齋に整理して保存できる。必要なときに図書館などに出向きたい。捨てるには「もったいない」が身についた年齢層の人たちの意見です。もちろん学会費は，一般の人と同じ金額を納めるという前提です。このための別刷を作る手間と経費，郵送料などコスト計算をしてみる価値はありそうです。このような意見は大切にしたいものです。会員の方々には，いろいろな意見をおもちと思います。この号では，会員の意見欄への投稿はありませんでした。会員の意見をお待ちしています。

会員の著作の書評について問合せがありました。書評については，著者が書いていただく方を選んで交渉し，著者からお願いして下さい。その原稿をニュース編集事務局あてお送り下さい。

学会ニュース編集事務局の構成が平成9年4月から変わり，植松 勉，鈴木 匡，米山勝美，日野稔彦（委員長）となりました。八重樫博志，佐藤 剛の2氏には大変ご苦労さまでした。（日野稔彦）